

# 山と博物館

第19巻 第9号

1974年9月25日

大町山岳博物館



ふたこのカモシカ 左オス 右メス

48. 10. 20 撮影 浜 昇

## カモシカと私

最初にカモシカに会ったのは、確か、昭和三十二年秋の北アだったと思う。あれからも十七年経ってしまった。その間、伊那谷で三年、乗鞍岳の麓で四年半、カモシカの生息地の近くに生活しながら、いつも彼らは遠かった。その後、カモシカには全く縁のない知床に二年をおくり、四十三年から本格的なフィールド通いが始まった。現在は主として、東北六県を調査中である。秋田県大平山系で撮影したこの双生児の写真は、晶子と名づけた母親が四十八年に生んだ仔達の十月下旬のものである。カモシカの双生児は珍らしく、これまでに、確かな聞きこみ等を含めて、私は四例知っているのみである。双生児故に、仔同志の行動にも特異なものが多く、既に、春から夏にかけて仔別れのすんだ他のファミリーと異なり、今日(九月十八日)、現地からの連絡によると、未だ完全な仔別れをしておらず、生まれた時のホームレンジに留まり父、母、今年の仔にまじり、これらと、つかず離れずの行動をとっている。現在調査中のカモシカの多くは、人工幼令林に主とした生活の場所を持っており、将来、造林された幼令木の生長と共に、彼らの生活が大きく左右されるものと考えられその成行が心配だし、生長過程における仔の遊び、仔別れの様式の究明に心急がれるこの頃である。また、今まで仔別れ後の追跡調査の例があまりなく、ようやく今年三月、四十七年生まれで、四十八年五月独立したチロと名づけたメスが、育った場所より五百メートル離れた地点にハンサムな連れ合いを見つけて定着しているのが確認でき、その追跡調査を行っている。

反すうに飽きたカモシカがよだれを流しながら、安心して船をこいで居眠りを始めると、それを眺めながら、カモシカとの付き合いもお互いにストレンジヤーでなくなつた今、ひっそりと生きている彼らの生活を暴くことのうしろめたさのようなものが脳裡を去来し、胸が疼くことがある。

# 北安曇地方の食用キノコ (予報) (二)

## 長 沢 武

### 三、ナラを中心とした雑木林のキノコ

カヤタケ 秋、雑木林の地上または朽木上に一本づつ発生する。傘の径はナラタケくらいで表面は鈍い肉色が淡赤褐色で、最初中央部がへん状に凹んでいるが、次第にじょうご状となりこまかなササクレがある。ヒダは密で白色、ツバはない。

ヌメリササタケ 秋、比較的標高の高いササの混る雑木林の地上に群生または散生する。アブラシメジの仲間、他にキアブラシメジムラサキアブラシメジ、マルミノアブラシメジなどの食菌があるがいずれも茎が棍棒状で傘、茎とも強い油状のヌメリがあり、さらに茎が美しい淡青色をしているのが特徴。

ヤマイグチ 梅雨の終りの頃から秋にかけて山麓の雑木林から二〇〇〇に近い高山帯のハイマツの林下に散生または孤立する。安曇地方ではイグチの仲間をリコボウ、ジコボウと呼んでいるが、イグチの仲間は共通して傘の裏側が海綿状で管孔が集ってできている。ヤマイグチは、おなじみの唐松林に発生する。ハイマツと大きな型は似ているが、傘の表面に赤い点がある。似た仲間にキンチャヤマイグチ(食)があるが、傘の表面が明るい橙黄褐色で、茎の根元を傷つくと青変する性質がある。また、傘の色はキンチャマイグチに似ているが、茎が短かく褐黄色をしている。二方イグチ(無毒)があるが、これはかむと苦味があるのですぐ解る。

### 四、広葉樹林のキノコ

サクラシメジ 秋、キノコのシーズンに入ると、ナラを中心とした樹林の地上に、ホウキタケと共に早期に、しかも多量に発生する

キノコで、その年のキノコの豊凶を占うように、安曇地方ではアカタケと呼ばれ一般に知られたキノコである。名前の如く傘の表面は桃褐色をし大きさはホンシメジ大で一本づつ直生し列を作って発生する。似た仲間にオオサクラシメジ、フキサクラシメジ、ヒメサクラシメジ、アケボノサクラシメジなどがあるがいずれも弱いほろ苦味があるが食べられる。

アブラシメジ 秋、広葉樹林内地上に群生または散生する。前掲のヌメリササタケに似たタイプで、傘、茎共に強い粘性があるのが特徴。尚姉妹種に、次の三種があるが区別点の表の通りである。

種名	傘の径(センチ)	傘の色	茎の色	粘性
アブラシメジ	5-10	黄褐色-帯紫褐色	白色-淡紫色	あり
ムラサキアブラシメジ	25-5	帯青紫色-褐色	淡紫色	あり
キアブラシメジ	2-5	純い黄褐色	白色	あり
マルミノアブラシメジ	25-5	オリーブ黄色	傘の色と同色	あり

ウラベニホテイシメジ ホンシメジに似ているが、一本立ちで直立巨大型、ヒダは疎で成長につれて白色-ピンク色になる。秋(または梅雨の終り頃)林内地上に散生する。食用ではハルシメジに、毒キノコではイッポンシメジやクサウラベニタケと似ている。その区別点は次表の通りである。

アイトケ 夏土用の頃から秋にかけて各種の広葉樹林の地上に散生する。ハツタケの仲間、アオハツ、アイヨヘイジなどと呼ばれているキノコである。傘はハツタケ特有の浅いじょうご状をし、表面に灰緑色のモザイク模

種名	傘の径(センチ)	傘の色	ヒダ	茎
ウラベニホテイシメジ	7-15	ネズミ色	疎	太く長く肉厚くしめる
イッポンシメジ	5-16	黄白色-鉛色	やや疎、はじめ白色のちピンクから肉色、湧生	10-18、15-3
サウラベニタケ	3-8	ネズミ色	やや疎、はじめ白色のちピンクから肉色、湧生	8-15、10-3

様を現し、茎は短かくしかも半分くらい土中にある。姿型はチチタケと似ているが、白い乳液を出さないのですぐ区別できる。

アカヤマトリ イグチ(リコボウ)の仲間、夏から秋にかけて、孤立又は散生する。ヤマドリタケと共に傘の径が10-20にも達する巨大型イグチで、傘の表面は黄白色のヒダ裂れがある特徴あるキノコで、他にまぎらわしい種類はない。

コウタケ 安曇地方ではかつてカタケと呼び、昔は人寄せや祝儀にはなくてはならないキノコであった。乾燥して保存し、もどして砂糖で煮付けて食す。ナラ林に秋列を作つて群生している姿は兎耳である。深いじょうご型で、淡紫褐色の表面には濃色の大きなササクレを伴い、傘の径15-30もある巨大型キノコで、傘の裏面は針状突起の集合からなっている。似た仲間にじょうご型も浅く、傘の径も10cm内外、ササクレも少ないケロウジがあるが、強いヒ辛味があり食用にはならない。

ホウキタケ 秋、広葉樹(主としてナラ)の周囲や伐採跡のスキの葉の腐蝕した地上等場所をばす発生する。普通のキノコのように傘はなく、網目状の頭部と茎からなる10cm前後のキノコ。

No.	種名	大きさ(センチ)	枝の状態	茎の色	肉の状態	食毒の別
1	ホウキタケ	高10-15	先端は多数の細枝となり、先端部は美しい淡紅紫色	灰黄白色	全体に弾力に富むので、枝先もこれに似る	食、すぐ食しても可
2	ハナホウキタケ	高10-16	先端部に至つてもマツチ樫太さ	黄土褐色	傷つけるると赤褐色になる、弾力には中くらいで、運搬中にこぼれやすい	食、いったん身で、一昼夜水にさらしてから食す
3	キホウキタケ	高12-20	②と同じ	鮮黄色	根塊部大で堅い感じ	毒
4	シロホウキタケ	高10-16	①と同じ	灰白色	①と同じ	食、①と同じ
5	ムラサキホウキタケ	高2-5	①と同じ	淡紫色からスミレ色	①と同じ	食

五、針葉樹林のキノコ

(1) 杉林のキノコ

アミガサタケ 春、秋、とくに春、スギ林の周囲や伐採跡のスキの葉の腐蝕した地上等場所をばす発生する。普通のキノコのように傘はなく、網目状の頭部と茎からなる10cm前後のキノコ。

まれに針葉樹林にも発生する一般的なキノコで、サン



クサウラベニタケ

サタケ、茎の径一、内外で、小型のアンボン  
 アミガサタケ、大型で高さ14〜20になるオ  
 オトガリアミガサタケなどがあるが皆食用と  
 なる。ただし、別属のシヤクマアミガサタケ  
 は毒菌であるから注意が必要。アミガサタケ  
 は頭部が蜂巣状の凹で、暗褐色であるが、シ  
 ヤクマの方は脳状のしわヒダからなり暗赤褐  
 色である。

チャナメツムタケ 夏の終り頃から秋にか  
 け、針葉樹特にスギの葉や枯枝の埋れた腐蝕  
 土上に群生または散生する。ナメコの仲間  
 大ききナメコ大、傘はレンガ色で中央部だ  
 け濃色、周辺に黄白色のササクレを附着し、  
 粘性がある。

(2) アカマツ林のキノコ

シモフリヌメリガサ 晩秋、紅葉が半ば落  
 ちた頃、つまり霜が一二度来、他のキノコ  
 の発生が止った頃群生する。ヒダや茎は白黄  
 色であるが、傘の表面は帯黄色、中央部は黒  
 色が濃いのでなかなか見付けにくい、一本  
 見付けるとその近くにぼつぼつと列をなして  
 はえているので、落ちついて探すのがコツ。  
 傘の表面は粘液でおおわれているが、傘はこ  
 われ易いキノコ。似た仲間にヒメヌメリガサ  
 キヌメリガサ、シロヌメリガサ、フコヤマタ  
 ケ等があるがいずれも食用となる。

キシメジ 秋、普通キノコの時期に松林や  
 広葉樹林に点々と発生する。全体が淡黄色な  
 いし黄緑褐色で、傘表面僅かに粘性があり、  
 サクラキシメジの小型の感じで一本つづはえる。  
 シモフリキシメジ シモフリヌメリガサと同

種名	傘	茎	ヒダ	発生場所
シモフリヌメリガサ	高2〜5、帯褐色オリーブ色、周辺淡黄色	高4〜7、至7〜10下方細まるものあり内部中空	疎、黄、淡黄色	マツ林
シモフリキシメジ	高4〜7、黄白色の地にすず色紋、表皮はげ易い	高8〜10、至15〜20下方太まるものあり内部充実	疎、はじめ白色のち黄色	マツ
アイシメジ	高4〜10、黄色の地に暗緑色のセシイ紋におおわれる中央濃色	高5〜10、至10〜20根元わずかにふくらむものあり内部充実	疎、黄、白色か黄	広葉樹林、マツ林

じ頃発生、該種の方が大型であるが安曇地方  
 では両者共シモフリキシメジと呼んでいる。似  
 た仲間にシモフリヌメリガサ、アイシメジが  
 あるがその区別点は表の通りである。

マツタケ あまりにも知られたキノコ、ア  
 カマツ林だけでなく、高山帯に属するコメツ  
 ガ、シラビソの林にも発生するが、こちらの方  
 が発生時期が少し早く、匂いも薄い。マツ  
 タケの発生し易い環境は、腐蝕表土があまり  
 厚くなく、深土の赤土が所々露出しているよ  
 うな地形で、地表面に下草や雑木のあまり無  
 い所で、所々に露岩やネジキ、ホツツジ、ハ  
 イヌツゲなどが生えているような地質が良く  
 赤松の樹令は15年以上でクロカワ(ロオジン  
 )が発生するようになると適期の通り、シヨ  
 ウゲンジも群生するようになる。またマツタケのシ  
 タ山と見ることができ、またマツタケのシ  
 ロは表土が浅い所では、発生は早いのが小型な  
 もの、深い所や老年期のものでは発生期が遅  
 く大きなキノコが発生する。

マツタケモドキ マツタケに似ているが小  
 型で、傘の表面にササクレを生じ中央部黒褐  
 色、煮ると色が黒ずみ香りはないが、菌切れ  
 は充分楽しめる。

クキタケ 夏から秋にかけ群発する。傘は  
 開くと中高扁平で、釘のような型となり、表  
 面粘性あり黄土褐色か赤褐色、ヒダははじめ

傘と同色、のち黒褐色となる。煮ると黒変する  
 性質がある。

オウギタケ 夏から秋にかけ、松林に普通  
 に見られるキノコ。傘の表面は淡紅色ないし  
 パラ色をし、著しい粘性がある。開くとヒダ  
 は傘に對して茎に長く垂生し、逆円錐形の扇  
 状となる

夏、秋、アカ松林内にぼつぼつと発生する。  
 開いたものでは中央浅く凹み、表面はブドウ  
 酒色〜赤褐色、肉は白色であるが傷つくと黄  
 褐色になり、数時間後には黒変する性質があ  
 るが、手で触れると汚褐色に変色する。

似た仲間でチキレハツタケ(食)は傘の径  
 6〜7、裏面の色はニオイベニハツツに似て  
 いるが粘性があり、ナラ林に発生するので区  
 別できる。

ハツタケ 昔からダシ汁のうまいので知ら  
 れているキノコ。開くとほぼ扁平かじょうこ  
 形となり、淡赤褐色〜汚紅淡褐色で濃色の環  
 状紋がある。ヒダも同色でよい匂いを持つ。  
 茎も傘と同色中空で、全体傷つけると暗紅色  
 の乳液を分泌し、青藍色に変るのが特徴。

似た仲間にアカハツ(食)がある。傘径共5  
 〜10、ハツタケに比し傘表面が朱黄色である。  
 ヌメリイグチ 夏から秋にかけ発生するア  
 カ松林のイグチで、唐松林に発生するおなじ  
 みのハナイグチに、大きさ、型、色と似てい  
 るが、茎のツバより上は黄色で下はほぼ白色  
 の地に褐色の粒点とシミを生じると、孔口  
 がハナイグチの角形に対しこちらは円形であ  
 るのが区別点である。

アミタケ ヌメリイグチより僅かに小型で  
 傘の色は少し黄色味が強く、孔口が浅く大小



サクラキシメジ

不同で不正角形、しかも茎に對し放射状に配  
 列されてい、イグチのように管孔が傘から簡  
 単にはぎとれないのが特徴。

クロカワ 安曇地方でロウジンと呼んでい  
 るキノコ。傘の径10〜20もあるのに茎は3  
 〜10、傘の色も黒っぽいネズミ色で、地面  
 にはりついたような感じで生えているのでち  
 よつと目につきにくい。肉は厚く白色だが傷  
 つくと赤紫色になる性質があり、弱い苦味が  
 ある。傘の裏面の管孔は白色。煮ても残るほ  
 る苦味と肉の厚みが昔から通人に好かれてい  
 る。

シヨウゲンジ アカ松の大きな木のある附近に  
 群生または散生する。傘表面は帯黄土色で開  
 いたものでは放射状の浅いシワがある。出は  
 じめは虚無僧が被る籠のような形で膜質のツ  
 バでおさえられている感じ。サクラキシメジ、  
 ホウキタケが盛りを過ぎ、このキノコが出は  
 じめるとマツタケの時期となる。すぐれた食  
 菌で木曾谷方面では大いに利用している。

姉妹種に黄色が強いキシヨウゲンジと全体  
 が濃い紫褐色をするムラサキシヨウゲンジが  
 あるがいずれも優秀な食菌である。

以上の他赤松林には後述のカラ松林に出る  
 アミハナイグチもよく発生する種である。

(白馬村役場・大町山岳博物館調査員)



# 北アの初期登山者と

## 「五万分の一地図」

三井 嘉 雄

(2)



北嶺尾根からの槍ヶ岳の三角標 中島測量官撮影

測量記  
録では、  
館澤彦が  
選点のた  
め前穂高  
に登頂し  
たのが明  
治二十六  
年八月一  
日となっ  
ているの  
で、ウエ  
ストンが  
途中で会  
った測量  
部員とは  
まきれも  
なく館澤

『槍ヶ岳之美観』によれば、「又白、長七、穂高の高峰巍然として、雲表に聳ゆ、其の内最高なるものを又白とし、陸軍の三角標あり」と記されている。陸軍とは陸軍参謀本部のこと、五万の地図は、はじめ参謀本部で測量し、発行したから、古い頃には「参謀本部の地図」とも呼ばれていた。地図の発行者のところには大日本帝国陸地測量部となっていた。その後になってから内務省地理調査所が所管し、現在は建設省国土地理院が担当している。

ウエストンは「日本アルプス登山を探険」の中で前穂高の測量について及んでおり、明治二十六年八月に嘉門次を伴って登山者として前穂高に最初の踏跡をしるしたおりに、(明治十三年にガウランドが、すでに登つたと

の説もある)「二週間前に嘉門次と、もう一人の猟師が政府の役人と一緒に行ったが、この最高点(前穂高のこと)への最初の登山に成功した。山頂近くの悪場で役人は滑って岩から岩へと激しくぶつかりながら六十フイー トほどはうり出されたように転がり落ちたが、死ななかつたほうが不思議なくらいだった」と述べている。ウエストンは、実はその少し前の八月二十四日に徳本峠を越えたおりに、島々谷の野天風呂で、前穂高の山頂付近で滑り落ちた陸軍の測量部員が療養しているところを、いき会っていたのである。そしてウエストンが彼に前穂高の標高を尋ねたが、測量部員は答えられず、ウエストンは自分の持っていた水銀気圧計で、前穂高の頂上が一〇一五〇フイー トであることを知つたのだ。た

彦である。彼は測量官ではないから観測器材を持っていなかったのは当然のことである。ここで重要なことは、従来、測量官の登頂が八月十日頃と推定されていたが、日付が判明したことで、これは文献上、前穂高岳の初登頂の記録でもある。

なお日本人の登山者としての前穂の最初の登頂者は明治三十八年に登つた鷗殿正雄の一行であった。

また槍ヶ岳や有明山を測量した中島崙の文章によれば、「三輪君が穂高を測量したときにも二、三週間はかかっています」とある。三輪君は、前穂高の三角点からの測量に実に八月二十二日から九月十二日まで費している。明治二十九年のことである。

燕岳から東天井を経由して槍沢に下り、そこから槍ヶ岳に登つた志村鳥嶺は、明治三十九年に山中で測量部員と会い、槍ヶ岳の測量の状況を記している。坊主の岩小屋で「天候不良の故を以て測量意の如くならず、予定の日数にして下山すること能はず、用意の食糧欠乏を来たし、数日同一回粥を啜り、副食物は全く絶えた。」(「やま」)測量部員と遭遇した。そして志村の「黎明期の上高地」にも、参謀本部測量技師大熊の一行が滞在していたこと、すでに六十日も天候待ちをしていること、約二時間だけ晴れ間があれば測量を終ること、そのため食糧を使い切ってしまったことなどが語られ、志村たちは食糧を少し分けてやったと書いている。

槍ヶ岳の三角点からの測量は、明治三十五年九月に中島崙によって行なわれていたので、志村が会った測量隊は三等三角点から測量する一行であったと考えられる。中島たちも坊主の岩小屋に宿泊している。

中島崙の「初期測量時代・槍ヶ岳の思い出」には、「漸く山頂につきました。山頂は今のように平面の所は全然なく屋根のように(型)だったので、少しけずりとって平にし測量標石を立てた」と苦心のようすが綴られて

いる。槍ヶ岳は播隆上人も頂上を少し平らにしており、頂上に登り切ったすぐ左手の岩石が、槍の穂先を横から見たとき約一、五メートルの厚さで人工の手が加えられた跡が見える。

『槍ヶ岳之美観』では、「峰の平なるもの四坪ばかりあり、陸軍之れに三角標を立て、柱は皆之れを白色に塗り、中央の石は、質堅き花崗岩を以てせり」となっている。測量に使つたらしい柱は、ウエストンの「A new factor in Unfamiliar Japan」(まだ知られていない日本)邦訳なし)の槍ヶ岳の頂上の写真に写っている。

またウエストンは大正元年に槍ヶ岳に登つた時、例によって案内者に嘉門次をと考えていたが、嘉門次は参謀本部の測量にやとわれていて留守中であつて、残念がつている。

黒岳(水晶岳)は南北の両頭に分かれていて、三角点(二九七七メートル)が北峰にあるのだが、当時二九九〇メートルとされ、三角点のない南方の方が北峰より二十メートルぐらゐは高いので、当時、立山・槍ヶ岳間で唯一の貴重な三千メートル峰が消えてしまつたといわれたものである。

黒岳の測量では、人夫から聞いた話として「山を想へば」の中に次のような記載がある。測量中に一人の人夫が病気になる、つき添いの人夫とわずかな食糧をつけて下山させることになったが、三ツ岳のあたりで野宿すると、つき添いの人夫が心細くなつて一人で下山してしまい、残された病人はそこで亡くなつてしまつたというのである。当時の測量官もそれを手伝う人夫も、測量に命をかけていたものであろう。(「山と溪谷」通信員)

山と博物館 第九巻 第九号  
発行所 長野県大町市TEL(026)211-1111  
印刷所 大町市下仲町 大町山岳博物館  
大町市大系タイムス印刷部  
定価 年額四〇〇円(送料共)(切手不可)  
郵便振替口座番号(長野)三三二二九九三